

2020年5月31日

## 一つの霊

緊急事態宣言が全国で解除され、ウィズコロナと呼ばれる新しい日常が始まりました。わたしたちはこれまで慣れ親しんできた生活様式や習慣を新しい観点や角度から見直すように求められています。この新しい日常をどのように生きていくことがすべての人の喜びにつながり、また「神の喜び」（詩編104・34）につながっていくのか、祈りの心で、聖霊降臨のメッセージに耳を傾けたいと思います。

聖霊降臨は、創世記11章に記される有名な「バベルの塔」の物語の逆転現象であるとよく説明されます。「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」（11・4）と人々は自分たちのことだけを考え、利己的になり、神の思いとは異なる道を歩んでいました。そこで主は降《くだ》って来て、「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない」（11・6）と互いの言葉を聞き分けられないようにしてしまいます。一致から混乱へと展開するのがバベルの塔の物語です。

一方で、聖霊降臨の出来事はその逆の展開が示されています。人々は聖霊が訪れるまで分裂しており、互いの言葉を理解することがありません。しかし「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響く」（使徒2・2）と「一同は聖霊に満たされ“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話し」はじめます（使徒2・4）。そこで「自分の故郷の言葉」（使徒2・6）が話されていることに気づき、大いに驚きます。聖霊に満たされた人々が話した言葉は、自分たちが昔からよく知っている《懐かしい言葉》だったのです。それは「わたしたちの言葉」（使徒2・11）でもありました。再び、人々は聖霊の働きによって一つになり、あたかも故郷に戻ったかのように、互いの心を通い合わせることができたのです。

わたしたちの現代世界を見渡すと、多くの分裂があり、いまだに貧困と暴力、偏見と対立は尽きることがありません。わたしたちが同じ《一つの霊》に生かされている、ということに心に向けることができればと思います。「ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです」（1コリ12・

13) というパウロの言葉がもつ響きは、パンデミックの影響が深刻化し、苦しんでいる人々が増える中で、重要性を増していると思います。もっとも小さな人々に、必要な支援と生きる力が与えられますように、聖霊による一致と連帯の心で、祈り続けたいと思います。

先日、菊地大司教様は、緊急事態解除宣言を受けて、新しいメッセージを公開されました。

「緊急事態宣言解除後の教会活動について」

<https://tokyo.catholic.jp/archbishop/message/38820/>

段階的な教会活動再開に向けた準備が、新たにはじまります。

「あなたがたに平和があるように。

彼らに息を吹きかけて言われた。」

(ヨハネ20・21-22)

カトリック立川教会 主任司祭  
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝